

短 信

会長短信

小 野 哲

今年のカレンダーを見て、ふと気づいたことは、おれも歳をとったなということは別として、カレンダーのグライダーまでが「フケ」て見えたことである。

学連の98年の OLD FASHIONED GLAIDERS を見てのことだから、当然ではある。

ふるいところで、1932のシュナイダーグルノウベイビイ(鷹七の原形)今ではどこでだれが乗っているやら。

シュライハー Ka6 これは1956、おなじみのアイオンがこの仲間で、鼻真目に見るから、古いぼれには見えないが、しかし old fashion にはちがいない。

そういうわけは、翼の厚さと胴の太さとが、練馬大根クラスであるから、デブのイメージがつかまとう。最近は、かなり無理な痩身術が流行する困った時代であるから、1978年の夏の英国で、地域的なグライダー競技会、たしか中欧大会の参加機の、細身の薄翼に驚いたのを思い出した、南英のビギンヒルだったろうか。その胴体の細いことといったら。

並列の複座だと、とてもこうはいかないが、前後の複座機ならむりやりに細身に仕立てるのが流行のようだ。

胴が太い細いで新旧をうんぬんするのは、如何にもおとなげないが、わかり易い。

田辺の格納庫に、細身の胴体で薄翼の複座機が「翼を休める」ことがあるだろうか。

そうなるための、状況はなんだろうか。

その頃、同志社の航空部は、現役が何人ほどで、そのうち搭乗資格を半数が持っているだろうか、それとも……。

ともかく、たぶん翔友会の所有で、部員に貸し

出すのだろう、間違っても学連所有ではありえない。というのは、むかしのある時期に新しい機体に対する「期待」が過熱してその為の寄付集めまであり、設計者も決まっていたかに聞こえた、がバブルではじける。

フルイ流行だったのだろうか、あの新規設計企画は。それとも……。

学連の深謀遠慮を知らないから、いうのだが、当今の、新機体購入願望の雲散霧消を皮肉っての、現実を先取りの、オールド思考のカレンダーを気取ったのであろうか。

まさか。まさかと言い切れないのは、かつて国産の新機体運用を目論んで調達したのが戦前の苦い、しかし考えようで、栄光の長距離飛行の経験があり、それが失政の予兆でもあるのだが、量産するめどもないままの新機体計画などに資金計画が立つわけがない。

企画の危うさは、なにがしの評議員も不審と判断できたから中止で募金分は返還することにもなった。新機体の新規設計企画の成否は、一種のかけであって、その新規設計の図面の善し悪しより、完成機体が、テストパイロット以後の搭乗者にもコナシ易いかに、評価の重点が置かれてもやむをえない。だからこそ競技会の成績が問題になる、操縦者の巧拙も絡む。それゆえに新しいよりも、獲得した競技会成績が優先するのが、選択の実情であろう。今ひそかにおもうに、翔友会が手にいれようとするには複座ということになるだろうか。そのゆえにこそ、評判の高い手慣れた機体に注目が集まる、Ka6 もそうであったが。

部長短信

坂口 一彦

母校同志社大学の近況、特に入学試験制度について述べます。永い間使ってきた前期、後期という言葉は1998年度よりなくなります。前、後期に相当するものとして、春学期、秋学期という言葉が学年暦に登場しました。1998年度より、いわゆるセメスター制が導入されることとなり、通年科目は廃止され半期科目となります。そのねらいは短期間に集中的に学習することによる教育効果の向上と国際化への対応であります。1998年度よりこれらの制度が実施されます。大変革ですが、教職員は意外とクールに対応しています。

ここで1998年の入試制度についてご紹介いたします。(1999年度入試については4月～7月頃に決定いたします。)

- 一般選抜入試
- 大学入試センター試験を利用する入試
- 推薦入試(指定校制)
- 推薦選抜入試(公募制)
- 社会人特別選抜入試
- アドミッションズオフィス(AO)方式による入学選抜
- 学内高校推薦入試

以上の制度による入試が実施されました。

一般選抜入試は入学定員5,490名の内3,309名を募集し、過半数の学生は2月初旬に実施される入試により入学してきます。

大学入試センター試験を利用する入試(3月に実施)の募集人数は全学で262名です。特に2学部では本学での学力検査等実施しないでセンター試験のみでの合格となります。他の学部では独自の試験を課しています。

指定校制による推薦入試があります。この制度は各学部で全国的に指定校を選定し、各高校長に

推薦を依頼し、高校長の推薦を尊重して入学を許可するといった制度です。この制度は20年以上の歴史を有し、学内ではそれなりの評価が得られています。本制度は本学の入試制度の変革の始まりといったところです。

推薦選抜入試は特にスポーツ、および一芸に優れた人を対象とした入試です。この制度は全学的には実施されていません。公募制推薦制度で、スポーツのみを対象とした制度とスポーツを含むいわゆる一芸入試といった制度が学部、学科によって設けられています。

社会人特別選抜入試は社会人を対象とし、有職者または満22歳以上の人に出願資格があります。3学部の夜間主コースにのみ募集されています。

AO方式は書類選考と面接で入学者を選ぶ方式です。書類、面接ですぐれた個性を見つけ出そうとする方式で、同志社大学で是非勉強したい人、勉強して欲しい人たちを全国各地から迎えるといった制度です。

学内4高校より約1,100名を推薦によって迎え入れています。各学部、学科によって各高校へ推薦受入人数を指示し、その枠の中で入学を許可するといった制度です。

以上入試制度の現状について簡単に述べましたが、流動的な要素が多く、1999年は一部変更される制度があるかとも思います。特に私立大学は少子化現象の影響を受け、今やサバイバルゲームに勝ち抜くための方策として入試制度の検討は不可決のものです。大学入試は国公立大も含めた、大学が社会の動きに連動し、対応しなければなりません。学生の質の向上をねらいつつ、いろいろな方策を模索している今日この頃です。

監督短信

昭和62年卒 新庄博志

毎年、編集長には申し訳けないと思いつつも、やはり「短信」は、3月末にならないと、なかなか筆が進まない。全国大会の祝勝報告も兼ねて、と期待しつつも、なかなか難しい。

近年は3月の年度末に幹部交替式と、その後の追いコンというのが常になっている。4年生にとっては不景気の中、就職が決まらなると落ちていくクラブに専念できない。何よりも、後を預る3年生の責任感の自覚が高まった。

今年の卒業生のかわいそうなところは、「今が底」という言葉を、4年間背負い続けた事だろう。数字的にも目を見張る戦績も上がらず、部員も減少の一途の中、監督も当てにならず、その心中は察するに忍びない。ただし、それはそれと、割り切れるだけの要領と、キャパシティには、少々の物足りなさを感じていた。

そんな中で追いコンの時、卒業生の中から「同志社の航空部として、先輩から後輩へ、伝え続けていかなければならない事」という言葉が出た。伝えきれないジレンマと、伝わりきらないフラストレーションは、おとなの先輩の必要性を導びいた。レールの上を走ってきた彼らは、いつの間に

か、自力でポイントを切り替える判断材料を積み残してきた。それは知識のみならず、部の気質に及んでも。それが今、学生の中から、自らが次へ伝えていく事の大切さに気付いた事は大きな収穫だ。交替式や追いコンも、押さえるところは押さえて、道理な進行ができた。新キャプテンも、筋を通した就任挨拶ができた。

是非、今年の現役の顔を見に来ていただきたい。彼らの表情には気負いなど全く漂わない。その瞳には青年らしいすがすがしささえ感じられる。明るく屈託のない雰囲気の下には、必ず多くの新入部員が集まるだろう。誰れも、眉間にしわの寄せた顔に近づこうとはしないのだから。

本誌を御愛読の諸兄、どうぞ今こそ力を貸して下さい。先輩から後輩へ、伝えることの重要性を再認識したものの、もちろんすべてを伝えられる訳ではありません。それを補えるのは先人だけです。先ゆきまだまだ不透明な日本経済。彼らの生き生きとした面目に、まだまだ日本の社会も、そして同志社航空部も、捨てたもんじゃないと思うはずです。

ASK-13 イオラス

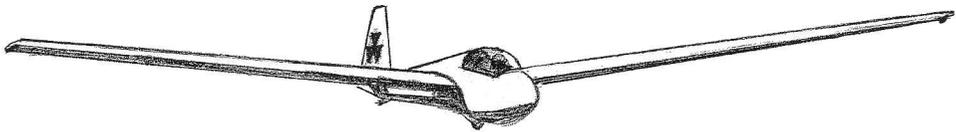


イラスト 加藤 寛(昭和46年卒)